南翔、眞茹、嘉定の占領

六、三月三日の戰況

此日早朝より追擊を再興し第九師團の主力は南翔に一部は眞茹に向ひ第十一師團は嘉定に向つた。

午前八時三十分先頭部隊は南翔に入り九時三十分第二十二聯隊次で到着し混成第二十四旅團及第六旅團も亦續いて來り確實に之を占領した、第九師團司令部も亦午后南翔に進出した。眞茹方面に對しては步兵第十八旅團の主力は午前七時頃眞茹鎭に入り附近を確實に占領した。第十一師團は婁塘より嘉定に向つたが同時に第二十二聯隊は南翔占領後嘉定に向つて之を狹擊するの策を採り午后五時三十分嘉定城の一部を占領した。

國立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

吳淞砲臺の攻略

吳淞砲臺の攻略は約三旬の間水路安全を確保するに止め徹底的攻撃を差控へて居つたが三月二日敵守兵の數著しく減少し其士氣も亦沈滯せるの情報を得茲に翌三日を以て攻撃を敢行することとなつた。

攻略部隊の編制

吳淞砲臺攻略部隊は第一水雷戦隊司令官（大佐有地十五郎）の指揮下に左の如く編成せられた。

右翼部隊　一水戦陸戦隊（一個大隊）

大隊長　少佐　江島久雄

第一中隊長大尉　奥村三郎

第二中隊長大尉　前田寛二

中央隊　上海陸戦隊第七大隊（三個中隊）

軍令部戦史編纂官高松乙（花崎納）

(8. 3　10.)

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

大隊長　少佐　勝野　實

第十三中隊長大尉　井上武男

第十四中隊長大尉　林　孝善

機銃中隊長　大尉　鷹尾卓海

左翼隊　歩兵第二十四聯隊第四中隊

中隊長　歩兵大尉　柴田二郎

砲兵　陸軍重砲兵大隊（十五榴、十五糎臼）

海軍陸戰隊砲隊

指揮官中佐　樋口　曠

第六大隊長大尉　志賀正成

第一中隊長大尉　山内英一

軍令部戦史編纂官稿紙乙（花崎納）

(8. 3　10.)

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

第二中隊長大尉　莊林規矩郎
第三中隊長大尉　石渡貞良
第四中隊長中尉　佐木軍三

運送船　指揮官　少佐　松本龜太郎（出雲航海長）
宜陽丸、金陵丸、安山丸、奉天丸

上陸部隊　指揮官　中佐　山崎助一（夕張副長）

援護部隊　夕張
第三十驅逐隊
第二十二驅逐隊
能登呂及第一航空戰隊飛行機

呉淞攻略部隊は二日夜半より行動を起し翌三日午前五時

軍令部戰史編纂資料　別紙乙　花崎納

(8. 3　10.)

國立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

迄に左の如く乗船を了した。

一、第一次上陸部隊ー一水戦陸戦隊は金陵丸、宜陽丸に乗船

二、第二次上陸部隊ー第二十四聯隊第四中隊は安山丸に乗船夕張附近に待機す

三、第三次上陸部隊ー第七大隊は長陽丸に乗船夕張附近に待機す

行動開始

明くれば三月三日の曉天、濛氣は深く黄浦江口を銷し四邊の通視に困難を覺ゆる程であつたが各部隊は豫定の如く行動を起した、海上平穩で日昇るに連れ霧は散し絶好の天氣となつた。有地司令官は夕張及驅逐隊を率ゐ午前

軍令部戦史編纂資料綴乙　花崎納

(8. 3　10.)

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

五時十一分出港し鐵道棧橋附近に下江午前五時四十七分より揚陸地點を砲擊した、また能登呂及基地飛行隊は爆擊を開始し第二十二第三十驅逐隊は海上より砲擊を初め、更に陸軍砲兵は陸上より之に呼應して砲火を注き敵を沈默せしめた、斯くして砲擊約三十分にして之を止め次で陸戰隊發進の令が下つた。附近に待機して居つた金陵丸宜陽丸（一水戰陸戰隊乘船）は午前六時三十分錨地を發し皐月及水無月の誘導を受けつゝ上陸地點に向つた、吳淞鐵道棧橋に待機しありし安山丸（陸軍吳淞支隊乘船）及長陽丸（第七大隊乘船）は午前六時出發上陸地點に向つた、午前七時五分陸戰隊は金陵丸を先頭として安山、

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

宜陽、長陽の順序に「フォート、ホテル」東方小棧橋に横附し敵前上陸を敢行した、金陵丸は横附直前に敵彈を蒙り蒸氣管を破りし機械室には蒸氣噴出して白煙濛々と立揚り一等機關兵松田利夫、二等機關兵井銅重藏は壯烈なる戰死を遂げた。此危急の際に金陵丸は巧に操縱して海岸に擱坐せしめ豫定の如く陸戰隊を揚陸せしめた。各隊は勇躍して岸に登り一水戰陸戰隊第一中隊は直に前進し、フォートホテル附近一帶を占領し、吳淞稅關の檣頭に軍艦旗を掲揚した、時に午前七時二十一分、吳淞に輝いた最初の日章旗であつた。また右翼方面に進出した第二中隊は吳淞砲台に向つて攻擊前進し地雷其他の防禦物

日章旗輝く

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

砲台占領

を除去しつゝ躍進し午前八時五分吳淞砲台を占領し其旗竿頭に日章旗を揭揚した。同時に陸軍歩兵二十四聯隊第四中隊は吳淞鎭に進出しまた第七大隊は中間地區より吳淞鎭西方へ出で微力なる敵を驅逐しつゝ午前九時三十分砲台並に附近一帶を完全に占領した。此日我に對抗せる敵は明かならざるも交戰の狀況より判斷し重機銃數挺を有する一ヶ大隊以內の兵力ありしものの如くであつた。

此戰鬪に於ける我が死傷は左の如くであつた、

海軍部隊　戰死三　重傷七　輕傷五

陸軍部隊　戰死二　重傷三　輕傷五

斯くして上海附近の戰鬪に於ける局面は之を以て終結を

(8. 3 10.)

國立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

獅子林砲台の占領

告げた。

泰大佐の指揮する高知聯隊主力は三月三日吳淞棧橋に上陸し直に吳淞寶山の守備に就き戰後の整頓並に警備に努むる所があつたが翌四日午後獅子林砲台の殘敵を攻擊し之を奪取した次て兩砲台の砲を使用不可能ならしむべく爆破を行つた。

平(今)戰史編纂(高橋)乙 (花崎納)

國立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

彼我の死傷

上海事變に於ける我軍の死傷數は左の如くである●

上海派遣軍	戰死		戰傷	
	將校	以下	將校	以下
第九師團	二四	四〇五	五四	一、一九九
第十一師團	四	三三	六	九〇
混成第二十四旅團	八	一四六	一三	二六〇
合計	三六	五八四	七三	一、五四九

上海陸戰隊	戰死		戰傷	
	准士官以上	下士官、兵	准士官以上	下士官、兵
	六	一一二	四三	五九二

(8. 3 10.)

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

また支那側が公表した十九路軍第五軍淞滬抗日傷亡官兵統計表は左の如くである（十九路軍抗日血戰史料三五〇頁）

區分 / 隊別	陣傷數 官佐	陣傷數 士兵	陣亡數 官佐	陣亡數 士兵	備考
十六師	九二	一一七五	二九	三五〇	另有失蹤士兵一三一名
九十一師	一九五	二八二〇	四四	七五一	
十八師	一一四	一九六五	四六	一一七〇	軍校及教導總隊傷亡在內另失蹤官長十四員失蹤士兵二八一名另失蹤官長一二員失蹤士兵三一八名
第八十七師	一〇一	一三四〇	二四	四九九	
五八十八師	一四一	一五五七	五七	一〇三四	
軍獨立八十八師	三四	三一四	一六	一九五	
合計	六七七	九一七一	二一六	三九九九	失蹤官長一六士兵七三〇

傷亡失蹤總計官佐九一九員士兵一三八八二名共一四八〇一人

軍令部戰史編纂資料紙乙（花崎納）

(8. 3 10.)

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

三月三日午后、我が軍は嘉定、南翔の線に進出したるを以て自發的に進撃を止め支那軍が敵對行爲を爲さざる限り戰鬪行爲を中止する旨軍司官及第三戰隊司令長官は本日聲明を發した。

第三艦隊司令長官の聲明

帝國海軍ハ、上海附近ニ於テ帝國陸軍ト共ニ、平和的手段ニ依リ、帝國居留民保護ノ任務ヲ達成センコトニ努力シタリシモ、此ノ見地ニ據レル我軍ノ要望ハ、不幸ニシテ支那第十九路軍ノ容ルル所トナラズ、遂ニ戰鬪行爲ヲ惹起スルニ至レリ。今ヤ支那軍ハ當初要求シタル距離以外ニ退却シ、帝國臣民ノ安全ト上海租界ノ平和ハ茲ニ回復セラルルニ至レルヲ以テ、本戰ハ支那

(8. 3 10.)

國立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

軍ニシテ、對的行動ヲ執ラザル限リ、戰鬪行爲ヲ中止セントス

右聲明ス

昭和七年三月三日

日本第三艦隊司令長官　野村　吉三郎

七、戰雲收まる

艦船派遣陸戰隊の歸艦

三月三日以來陸上に派遣せられ各方面に奮鬪した艦船派遣陸戰隊は狀況漸次平靜に歸するに及び艦船自體の固有任務に服すべく左記の如く夫々歸還し、三月二十一日以後は特別陸戰隊のみを以て陸上警備に任することとなつた。

三月六日　安宅陸戰隊歸艦

(8. 3　10.)

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp